

## はじめに

### 平成31年4月中学校道徳科全面実施に向けて

- ・年間指導計画の立案  
教科書の教材の吟味
- ・組織的な指導体制の整備  
協力して授業を展開していく組織作り
- ・一人一人の道徳性の発達に着目  
道徳科の授業の特質の理解

- ・「特別の教科 道徳」（道徳科）は、他の教科等に先んじて平成27（2015）年3月に学習指導要領を改正し、中学校では平成31（2019）年4月から全面実施
- ・道徳科で養うべき基本的資質は、多様な価値観の、時に対立がある場合を含めて、誠実にそれらの価値に向き合い、道徳としての問題を考え続ける姿勢
- ・特定の価値観を押し付けたり、主体性をもたず言われるままに行動するよう指導したりすることではない
- ・発達の段階に応じ、答えが一つではない道徳的な課題を一人一人の生徒が自分自身の問題と捉え、向き合う「考える道徳」、「議論する道徳」への転換を図る

## 道徳教育の抜本的充実が求められる背景

- ・ 深刻ないじめの本質的な問題に向き合う
  - － 制度の改革だけでなく、本質的な問題解決に向かうことが必要
- ・ 決まった正解のない予測困難な時代を生きる
  - － グローバル化、情報化の急速な進展
  - － 科学技術の進化と新たな問題（人工知能、生命倫理…）
  - － 社会全体の持続可能な発展（環境問題、超少子高齢社会…）



自らの人生や社会における答えが定まっていない問いを受け止め、  
多様な他者と議論を重ねて探究し、  
「納得解」を得るための資質・能力が求められる  
（自分が納得でき周囲の納得も得られる解）

こうした資質・能力の育成に向け、道徳教育は大きな役割を果たす必要

1

## 道徳科の目標の構造

道徳科の目標において、道徳性を養うために必要な学習の過程を明示。

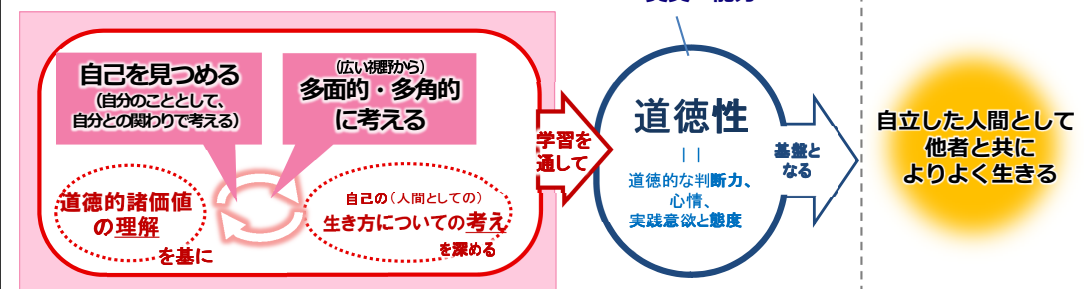
<道徳科の目標>

道徳教育の目標に基づき、よりよく生きるための基盤となる道徳性を養うため、

道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を広い視野から多面的・多角的に考え、人間としての生き方についての考えを深める学習を通して、

道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てる。

道徳性を養うために行う道徳科における学習



## 「道徳的諸価値についての理解を基に」とは

授業開始時点での生徒の道徳的価値についての理解を基にすること、および授業終了時にはより深まった理解に至ることを目指すということ。教え込みではないこと。目指すべき道徳的諸価値の理解については、内容項目の概要及び指導の要点に示されている。

授業開始時点での理解

(前理解)

授業終了時点での理解

理解の広がりや深まり

他教科等の「知識及び技能」とは異なり、知識として理解すること自体が目的ではなく、理解を深めて道徳性を養うことが目標であることを示している。価値の理解は、客観的に観念的に理解することではなく、自分のこととして考え、自分の生き方の手掛かりとして理解を深めていくということ。

## 「物事を多面的多角的に考える」とは

- 物の見方や考え方は人によって異なるものであり、道徳上のことは唯一絶対的な正解があるわけではないから、
- 友だちの意見をよく聞き、自分の考えを語ること。(対話的)
- 授業者としては、生徒たちの意見をよく聴き、対話のある(意見の交流がある)授業をするということ。TeachよりもCatch に心がける。

評価のポイントの一つ

- 生徒同士の協働、教員や地域の人との対話、先哲の考え方を手掛かりに考えたり、自分と異なる意見と向かい合い議論すること等を通じ、自分自身の道徳的価値の理解を深めたり広げたりする
- 資料を通じて先人の考えに触れて道徳的価値の理解を深めたり、自己を見つめる学習につなげたりすることができるような教材の開発・活用を行うことや、様々な専門家や保護者、地域住民等に道徳科の授業への参加を得ることなども効果的な方法
- 言葉により伝えるだけでなく、多様な表現を認めることも大切

## 「自己を見つめる」とは

- 自分の問題として考える。
- 自分であれば、どんな気持ちになるか、どんなふう考えるか、どのようにしようと思うかなど、当事者になったつもりで心の内を考えながら授業を受けること。(主体的)
- 他人ごととして評論することではない。また、「自分ならどうするか」というように「行動」を問うことに終始するわけではない。

評価のポイントの一つ

- 生徒が問題意識をもち、自己を見つめ、道徳的価値を自分自身との関わりで捉え、自己の生き方について考える学習とすることや、各教科で学んだこと、体験したことから道徳的価値に関して考えたことや感じたことを統合させ、自ら道徳性を養う中で、自らを振り返って成長を実感したり、これからの課題や目標を見付けたりすることができるよう工夫する
- 年度当初に自分の有様やよりよく生きるための課題を考え、課題や目標を捉える学習を行ったり、学習の過程や成果などの記録を計画的にファイル等に集積(ポートフォリオ)したりすることにより、学習状況を自ら把握し振り返ることができるようにすることなども考えられる

## 「人間としての生き方についての考えを深める」とは

- 授業で新しく獲得した価値理解(広がったり、深まったりした)を基に、人間としてよりよい自分の生き方を考えること。(深い学び)
- 価値の理解が新しくなる(価値の自覚をする)と同時に生徒は自分のこれまでの生活を振り返り、授業後の感想には自然と書き込まれることが多い。

- 様々な場面、状況において、道徳的価値を実現するための問題状況を把握し、適切な行為を主体的に選択し、実践できるような資質・能力を育てる学習とする
- 道徳的な問題を自分事として捉え、議論し、探究する過程を重視し、道徳的価値に関わる自分の考え方、感じ方をより深めるための多様な指導方法を工夫する
- 道徳的な問題場面には、⑦道徳的諸価値が実現されていないことに起因する問題、⑧道徳的諸価値についての理解が不十分又は誤解していることから生じる問題、⑨道徳的諸価値のことは理解しているが、それを実現しようとする自分とそうでない自分との葛藤から生じる問題、⑩複数の道徳的価値の間の対立から生じる問題などがあり、これらの問題構造を踏まえた場面設定や学習活動の工夫を行うことも大切

- ・ 道徳科においては内面的な資質である道徳性を養う  
言葉・表情・行為と道徳性の関係を理解する  
外面(言動)と内面(心)の区別

## 道徳性についての理解が最も基礎となる

心のはたらき(道徳性)をよくするのが道徳科

ありとあらゆる場と時における行動の指導は不可能であるから、ありとあらゆる場合に主体的に行動するための基になる道徳性を育成する

## 道徳性

道徳性とは、人間としてよりよく生きようとする人格の特性であり、道徳性を構成する諸様相である道徳的判断力、道徳的心情、道徳の実践意欲と態度を養うことを求めている。これらの道徳性の諸様相は、それぞれが独立した特性ではなく、相互に深く関連しながら全体を構成しているものである。したがって、これらの諸様相が全体として密接な関連をもつように指導することが大切である。道徳科においては、これらの諸様相について調和を保ちながら、計画的、発展的に指導することが重要である。

### ■ 道徳性の諸様相(学校教育における捉え方)

#### 道徳的判断力

- それぞれの場面において善悪を判断する能力
- 人間として生きるために道徳的価値が大切なことを理解し、様々な状況下において人間としてどのように対処することが望まれるかを判断する力
- 的確な道徳的判断力をもつことで、それぞれの場面で機に応じた道徳的行為が可能になる

#### 道徳的心情

- 道徳的価値の大切さを感じ取り、善を行うことを喜び、悪を憎む感情
- 人間としてのよりよい生き方や善を志向する感情
- それは、道徳的行為への動機として強く作用するもの

#### 道徳の実践意欲と態度

道徳的心情や道徳的判断力によって価値があるとされた行動をとうとうとする傾向性

#### 道徳的实践意欲

道徳的判断力や道徳的心情を基盤とし道徳的価値を実現しようとする意志の働き

#### 道徳的態度

道徳的判断力や道徳的心情に裏付けられた具体的な道徳的行為への身構え

### 【参考資料】

- ・ 情動 X(反射)システム 「こころの動きは脳辺縁系でつくられる」  
ホットな共感 拙速 アクセル
- ・ 意志 C(熟考)システム 「こころのあり方は脳皮質(前頭前野)で理解される」  
慎重 優柔不断 ブレーキ
- ・ 知性 頭頂部 左右側頭 クールな共感  
三部分の総合的なネットワークの中にある良心

### 「愛と信頼の関係」

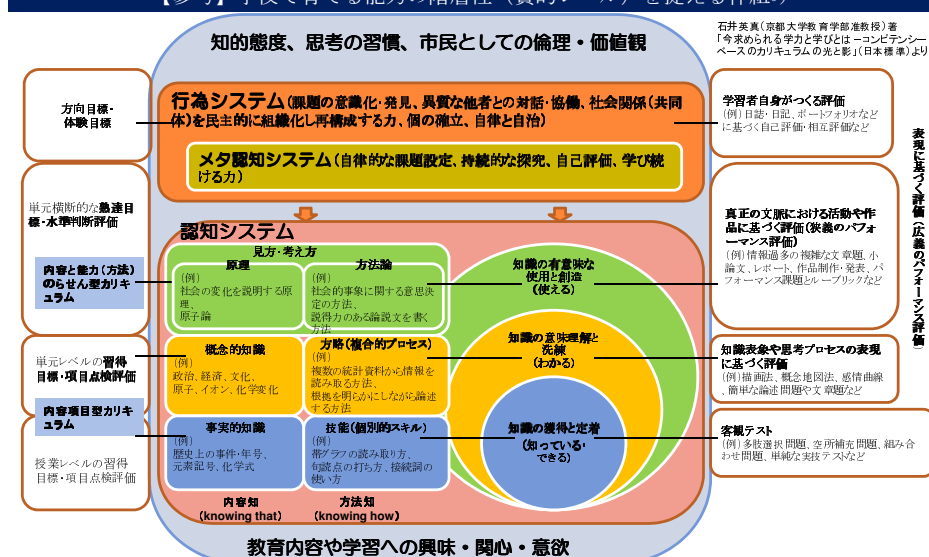
「信用」相手の能力を信じること 「信頼」相手の人間性に賭けること  
ニコライ・ハルトマン「人間関係の不思議は、自分が相手の中にあると信じたものが相手の中で育ってくる。」  
エマーソン「教育の秘訣は、生徒を尊敬するところにある。」  
温かく、厳しく、支える 3つのバランス つながる、心を読む、調和する 社会性

「哲学 天地の化育を知る 教育 天地の化育を賛ける」『中庸』

「道は人に遠からず。人の道を為して人に遠きは、以て道と為すべからず。」「中庸』

「徳は身に於いて得るなり」『礼記』 「徳は孤ならず、必ず隣あり」『論語』

### 【参考】学校で育てる能力の階層性(質的レベル)を捉える枠組み



カリキュラムの構造 教科内容(知識)のタイプ分け めざす学力・学習の質 評価方法の選択  
(出典: 学力・学習の質の明確化の枠組みについては、マルザーノら(1992)の「学習の次元(Dimensions of Learning)」の枠組みに若干の修正を加えたものであり、教科内容のタイプ分けについては、ワイゲンズら(2012)の「知の構造(Structure of Knowledge)」を再構成したものである)

内容項目＝教師と生徒が人間としてのよりよい生き方を求め、共に考え、共に語り合い、実行に努めるための共通の課題

内容項目は、生徒自らが道徳性を養うための手掛かりとなるもの

- A 主として自分自身に関すること
- 自主、自律、自由と責任
  - 節度、節制
  - 向上心、個性の伸長
  - 希望と勇気、克己と強い意志
  - 真理の探究、創造

- B 主として人との関わりに関すること
- 思いやり、感謝
  - 礼儀
  - 友情、信頼
  - 相互理解、寛容

- C 主として集団や社会との関わりに関すること
- 遵法精神、公德心
  - 公正、公平、社会正義
  - 社会参画、公共の精神
  - 勤労
  - 家族愛、家庭生活の充実
  - よりよい学校生活、集団生活の充実
  - 郷土の伝統と文化の尊重、郷土を愛する態度
  - 我が国の伝統と文化の尊重、国を愛する態度
  - 国際理解、国際貢献

- D 主として生命や自然、崇高なものとの関わりに関すること
- 生命の尊さ
  - 自然愛護
  - 感動、畏敬の念
  - よりよく生きる喜び

小学校の内容項目

- A 主として自分自身に関すること
- 善悪の判断、自律、自由と責任（低、中、高）
  - 正直、誠実（低、中、高）
  - 節度、節制（低、中、高）
  - 個性の伸長（低、中、高）
  - 希望と勇気、努力と強い意志（低、中、高）
  - 真理の探究（高）
- B 主として人との関わりに関すること
- 親切、思いやり（低、中、高）
  - 感謝（低、中、高）
  - 礼儀（低、中、高）
  - 友情、信頼（低、中、高）
  - 相互理解、寛容（中、高）
- C 主として集団や社会との関わりに関すること
- 規則の尊重（低、中、高）
  - 公正、公平、社会正義（低、中、高）
  - 勤労、公共の精神（低、中、高）
  - 家族愛、家庭生活の充実（低、中、高）
  - よりよい学校生活、集団生活の充実（低、中、高）
  - 伝統と文化の尊重、国や郷土を愛する態度（低、中、高）
  - 国際理解、国際親善（低、中、高）
- D 主として生命や自然、崇高なものとの関わりに関すること
- 生命の尊さ（低、中、高）
  - 自然愛護（低、中、高）
  - 感動、畏敬の念（低、中、高）
  - よりよく生きる喜び（高）

※ 赤字は今回の学習指導要領改正に伴い新たに指導することとなった学年段階を示している。

発達の段階を踏まえた内容項目の構成の見直し

- ・小学校低学年から中学校までのつながりを明らかにし内容の体系性を高め、児童生徒の発達の様子を踏まえ、ねらいをより明確にした指導を可能にするため
- ・生徒を指導するに当たっては、発達の段階を前提としつつも、指導内容や指導方法を考える上では、生徒の実態を踏まえ、個々人としての特性等から捉えられる個人差に配慮することが重要

| 発達障害等のある児童生徒に対する道徳科の指導について（例） |                                                                                                                                                                                                     |                                                                                                                                                                                                                                                                                |                                                                                                                                                                                                                                                                      | 別紙 4 |
|-------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------|
|                               | 学 習 上 の 困 難 さ                                                                                                                                                                                       | 集中することや継続的な行動をコントロールすることの困難さ                                                                                                                                                                                                                                                   | 他人との社会的関係の形成の困難さ                                                                                                                                                                                                                                                     |      |
| 困難さの状況                        | ・「聞く・話す」はできても、「読む・書く」が苦手<br>・文字の認識が困難な場合は、画数の多い漢字の識別や相手の表情を見分けることが難しい。 など                                                                                                                           | ・気が散りやすく、注意を集中させ続けることが困難であったり、必要な事柄を忘れやすかったりする。（不注意）<br>・話を最後まで聞いて答えることや順番を守ることが困難であったり、思いつくままに行動して他者の行動を妨げてしまったりする。（衝動性）<br>・じっとしていることが苦手で、落ち着いて活動や課題に取り組むことが困難な傾向がある。（多動性） など                                                                                                | ・社会性の発達が遅い。相手の心情理解が難しい傾向がある。<br>・暗黙のルールが理解できない傾向がある。<br>・特定の事物へのこだわり（やめない、変えない、始めない）がある傾向がある。<br>・感覚が過敏であることが多い。 など                                                                                                                                                  |      |
| 考えられる障害                       | 学 習 障 害 （ L D ） 等                                                                                                                                                                                   | 注 意 欠 陥 多 動 性 障 害 （ ADHD ） 等                                                                                                                                                                                                                                                   | 自 閉 症 等                                                                                                                                                                                                                                                              |      |
| 道徳指導上の困難                      | ・読み書きの習得については、努力が成果に結びつかない経験をしており、「努力してやり遂げる」ことには消極的になりやすい。<br>・読書が苦手で自主的に本を読む習慣がないため、知らない言葉が多い。同年齢の子供であれば理解できると予想されることを理解していない、あるいは誤解している場合がある。 など                                                 | ・注意持続が短く、態度が変わりやすいため、気まぐれで誠実ではないように見えることがある。<br>・多動性、衝動性により、ルールを守る気がない、安全を軽視していると受け止められることがある。<br>・相手の気持ちを考えない、結果がどうなるのか考えないで始めた行動やうっかりミスにより問題が起こることがある。<br>・ものごとを最後まで注意していないために、結果を記憶していない。「自分ではない」と主張し、それが嘘やごまかしと思われることがあることがある。<br>・別のことに注意がそれて、期限や待ち合わせなどの約束を守れない傾向がある。 など | ・相手の気持ちを想像することが苦手で、字義通りの解釈をすることがある。<br>・明文化されていないもの、暗黙のルールや一般的な常識が理解できないことがある。<br>・こだわり行動または感覚の過敏により、望ましいと分かっているにもかかわらずにできないことがある。<br>・誤って学習したことや修正が困難な傾向がある。 など                                                                                                     |      |
| 指導上の必要な配慮                     | ・言葉の意味や正しい名称を知らないことが多いので、言葉の意味などを丁寧に伝える。<br>・提示する教材などには、音声による情報を付け加える。<br>・自分の考えを文字で表現したり、文字で書かれた他者の意図を読み取ったりすることが苦手なので、言語コミュニケーションの方法を文字言語のみに限定しない（口頭で答えることも可能とする）。<br>・漢字の習得のみが困難な場合には振り仮名を振る。 など | ・適度な時間で活動が切り替わり、注意が持続できるようにする。<br>・成長が認められる行動や発言があった場合は、行動や発言のあった都度、評価する。<br>・「あと五分」、「ここまでやったら」など、短期的で具体的な見通しを示して努力できるようにする。<br>・必要なことをメモする、提示する、付箋で示すなどして、単純なミスをしなくて済むようにする。<br>・チェックリストや備忘録、スケジュール表などを用意し活用する。<br>・対話の工夫や幅広い場面で触れ合いをもち、信頼関係を築く。 など                           | ・他者の心情を理解するために、役割を交代して動作化や劇化を行う。<br>・「〇〇ですと言ったのは、△△さんが『～だ』と思っていたからです」など主語を明確にして説明する。<br>・わかりやすく伝えるために、イラストにしたりせりふを書き込んだりすることができるようになる。<br>・ルールは明文化する。同時に、本人が理解してもこだわり等により変えられない場合もあると理解しておく。<br>・最初から正しい知識を伝え、途中で修正する必要のないようにする。また、誤った理解をしていないか適宜確認し、できる限りの修正をする。 など |      |

※発達障害には上記以外の障害もあるが本専門委員会において発表された学習障害、注意欠陥性多動性障害、自閉症を中心に作成した。

### 学童期(小学校低学年)で重視すべき課題

- ・「人として、行ってはならないこと」についての知識と感性の涵養や、集団や社会のルールを守る態度など、善悪の判断や規範意識の基礎の形成
- ・自然や美しいものに感動する心などの育成(情操の涵養)

### 学童期(小学校高学年)で重視すべき課題

- ・抽象的な思考の次元への適応や他者の視点に対する理解
- ・自己肯定感の育成
- ・自他の尊重の意識や他者への思いやりなどの涵養
- ・集団における役割の自覚や主体的な責任意識の育成
- ・体験活動の実施など実社会への興味・関心を持つきっかけづくり

### 青年前期(中学校)で重視すべき課題

- ・人間としての生き方を踏まえ、自らの個性や適性を探求する経験を通して、自己を見つめ、自らの課題と正面から向き合い、自己の在り方を思考
- ・社会の一員として他者と協力し、自立した生活を営む力の育成
- ・法やきまりの意義の理解や公德心の自覚

『子どもの徳育の充実に向けた在り方について(報告)』より

16

B 主として人との関わりに関すること

#### 8 友情, 信頼

友情の尊さを理解して心から信頼できる友達をもち、互いに励まし合い、高め合うとともに、異性についての理解を深め、悩みや葛藤も経験しながら人間関係を深めていくこと。

真の友情は、相互に変わらない信頼があって成り立つものであり、相手に対する敬愛の念がその根底にある。それは、相手の人間的な成長と幸せを願い、互いに励まし合い、高め合い、協力を惜しまないという平等で対等な関係である。友達を「信頼」するとは、相手を疑う余地がなく、いざという時に頼ることができると信じて、全面的に依頼しようとする気持ちをもつことであり、その友達の人間性に賭けることである。相手の人柄に親しみを感じ、敬愛する気持ちをもち続けることである。分かち合い、高め合い、心からの友情や友情の尊さについて理解を深め、自分を取り囲む友達との友情をより一層大切に育てることが大切である。

「異性についての理解を深め」とあるのは、互いに相手のよさを認め合うということである。相手に対する理解を深め、信頼と敬愛の念を育み、互いを向上させるような関係を築いていかなければならない。独立した一人の人格としてその尊厳を重んじ、人間としての成長と幸せを願うという点において、異性間における相互の在り方は基本的に同性間におけるものと変わるところがない。

人間の社会は、互いに協力することによって望ましい社会生活が営まれ豊かな文化が形成されるのである。そこに生じる友情は、人間として互いの特徴や個性を尊重し、互いに支え、競い合い、高め合うことによって、深まるのである。心から信頼できる友達を求め、友達への期待も強まる時期に、友達との関係に、時には悩み、友達であるからこそ意見がぶつかることもある。青年前期にある中学生は、心身の成長は目覚ましいが、不安定な時期でもある。感情の起伏が目立ち、とするとささいなことから感情の行き違いが生じ、せっかくの友達関係が台無しになることもあるが、これらの悩みや葛藤を乗り越えることで、真の友情は培われていくものである。

〔第1学年及び第2学年〕友達と仲よくし、助け合うこと。

〔第3学年及び第4学年〕友達と互いに理解し、信頼し、助け合うこと。

〔第5学年及び第6学年〕友達と互いに信頼し、学び合って友情を深め、異性についても理解しながら、人間関係を築いていくこと。

## OECD2030年に向けた学習枠組み

私たちの社会を変革し、私たちの未来を作りあげていくためのコンピテンシー(「変革を起こす力のあるコンピテンシー」)

- ・新たな価値を創造する力
- ・対立やジレンマを克服する力
- ・責任ある行動を取る力(他の2つの前提となるもの)

倫理的に行動するということは、例えば、「私は何をすべきか」「それをしたことは正しかったのか」「限界はどこにあるのか」「自分がしたことの結果を知った上でそれをすべきだったのか」といった、規範や価値、意義や限界に関する問いかけをするということである。このコンピテンシーの中核になるのが、**自己調整の考え方**であり、自己コントロール、自己効力感、責任感、問題解決、適応力を含むものである。

発達神経科学の進展により、脳の可塑性の2回目の急激な増大は**思春期**に起きることが示されている。また、最も可塑性の高い脳の領域や仕組みは、**自己調整の発達に関するもの**であることが示されている。思春期は、もはや、単に脆く傷つきやすい時期としてではなく、**責任感を醸成する機会**として捉えられるのである。

### 道徳教育を推進するための指導体制の整備

- ・**校長の方針に基づき、道徳教育推進教師を中心に全教職員の共通理解を図り、組織的に取り組む**
- ・道徳科の指導は学級担任の教師が行うことを原則とするが、年に数回、教師が交代で全学級を回って道徳の授業を行うといった取組も効果的
- ・「解説」の22の内容項目についての**指導の要点のページ**を読み解きながら、道徳科の年間指導計画を**全教師の共通認識の下に**作成することが大切
- ・現代的な課題を取り扱う授業においては、担当する教科の専門性を生かして学年の全学級を回って道徳の授業を行うことも考えられる

## 実践的研修 その1 授業前の研修

道徳教材は人生へのルートであり、人生を味わう糧である。上手に料理し、スパイスを利かせよう。

- ◆ 教材の読みの深さが授業を左右する。
- ◆ 問いの新鮮さが、生徒を授業に引き込むコツ。

準備の第一歩は教材をよく読み、問いを工夫すること。  
「小・中学校学習指導要領解説 特別の教科道徳編」を読み、理解する。特に内容項目の概要と指導の要点。

## 実践的研修 その2 授業実践

- ◆ 授業は実践を重ねなければうまくならない  
教材を使いこなせるようになることが肝要  
同じ教材を使って複数のクラスでやってみる
- ◆ 一問一答の授業から対話のある授業に  
対話のある授業にするには、生徒の発言内容よりも、発言する生徒の「想い」を重視して聴くこと  
  
⇒楽しい授業をする。何を「楽しい」と思うかは、  
生徒の発達段階によって異なる。

## 実践的研修 その3 事後研修

### ◆感想を言い合う主観的研修からの脱却

授業記録を基に授業を客観的に分析  
(中学校の教員が納得する事後研修を)

授業記録をとり、授業記録から授業を解析

### 多様な教材を活用した創意工夫ある指導

- 道徳科は、主たる教材として教科用図書を使用しなければならない。
  - 道徳教育の特性から、各地域に根ざした地域教材など、多様な教材を併せて活用することが重要となる。
  - ・ 様々な題材で郷土の特色が生かせる教材は、生徒にとって特に身近なものに感じられ、教材に親しみながら、ねらいとする道徳的価値について考えを深めることができるので、地域教材の開発や活用にも努めることが望ましい。
  - ・ ほかにも、例えば、古典、随想、民話、詩歌などの読み物、映像ソフト、映像メディアなどの情報通信ネットワークを利用した教材、実話、写真、劇、漫画、紙芝居などの多彩な形式の教材など、多様なものが考えられる。
- 「学校における補助教材の適正な取扱いについて」(平成27年3月4日初等中等教育局長通知)など、関係する法規等の趣旨を十分に理解した上で、適切に使用することが重要

## 道徳科の評価の基本的な考え方

- ・数値による評価ではなく、認め、励ます個人内評価として記述式で行う評価
- ・個々の内容項目ごとではなく、大くくりなまとまりを踏まえた評価とすること
- ・他の生徒との比較による評価ではなく、生徒一人一人の成長に着目し、よい点や可能性、進歩の状況を積極的に受け止めて認め、励ますことが求められる
- ・学習活動により生徒がより多面的・多角的な見方へと発展しているか、道徳的価値の理解を自分自身との関わりの中で深めているかといった点を重視
- ・調査書（内申書）に記載せず、高等学校等の入学者選抜の合否判定に活用することのないように留意

## 生徒の学習状況を見取るための二つの視点の例

- ① 一面的な見方から多面的・多角的な見方へと発展させているかどうかを見取る視点の例
  - ・道徳的価値に関わる問題に対する判断の根拠やそのときの心情を様々な視点から捉え考えようとしている
  - ・自分と違う立場や感じ方、考え方を理解しようとしている
  - ・複数の道徳的価値の対立が生じる場面において取り得る行動を広い視野から多面的・多角的に考えようとしている、など
- ② 道徳的価値の理解を自分自身の関わりの中で深めているかどうかに関する視点の例
  - ・読み物教材の登場人物を自分に置き換えて考え、自分なりに具体的にイメージして理解しようとしている
  - ・現在の自分自身を振り返り、自らの行動や考えを見直していることがうかがえる
  - ・道徳的な問題に対し自己の取り得る行動を他者と議論する中で、道徳的価値を更に深めている
  - ・道徳的価値を実現することの難しさを自分のこととして捉え、考えようとしている、など

## 授業を担当する教師全員で協力して評価を行う体制を整える

### 協力体制の整備

- ・年に数回、教師が交代で全学級を回って道徳の授業を行うといった取組により学級担任が自分の学級を参観することが可能となり、評価の改善にも有効。生徒の変容を複数の目で見取り、評価に対して共通認識をもつ機会ともなる。

### 言語活動が得意でない生徒の評価

- ・観察法の併用が必要。対象となる生徒を絞り、見るべきポイントも分かりやすいように絞って観察する。複数教師による観察と情報交流を繰り返しながら観察記録を重ねていくことが大切である。

### 表面的には意欲が見えない生徒の評価

- ・小さな反応の中にも肯定的な意味がこもっている場合がある。教科の得意不得意などが教師との関係に影響を与える場合もあるため、担任以外の教師が授業を行った際に、授業観察メモを残すことも有効である。また、通年で感想を見返してみると積極的に取り組んでいる授業に気付いたり、最初はまったく感想を書かなかった生徒が書くようになっていくこともある。感想を初めて書いた時の授業がきっかけになっている可能性もあるので、その授業の学習記録から評価のポイントが見えてくることもある。

### Q 目標に「道徳的諸価値についての理解に基づき」とあるのだから、道徳的価値をどれだけ理解できたかを評価すべきではないのか？

道徳的価値について理解するということは、観念的に、知識として理解するのではなく、自分の事として、自分なりの考え方として理解するものです。  
（他の教科等における「知識及び技能」のように、客観的な知識として身につけることを目的としているわけではありません。）

このため、道徳科の目標では、「道徳的諸価値について理解する」とはせず、「道徳的諸価値についての理解に「基づき」…自己（人間としての）生き方についての考えを深める…」としています。

### Q 道徳性の諸様相（道徳的判断力、心情、実践意欲と態度）を評価の観点とすることはなぜ適当でないのか？

「道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度」はそれぞれ独立したものではなく、相互に関係し合っており、切り分けられないものであることから、これらを資質・能力の3つの柱にそれぞれ分けて位置づけることはできないものと考えられます。

また、児童生徒の人格そのものに働きかける道徳科の評価としては、観点別に行う評価（ABCの段階を付ける）自体が妥当ではないと考えられます。

Q 個々の内容項目ごとでなく、「大きくくりなまとまり」を踏まえた評価とはどういうことか？

道徳科の評価に関しては、

- ・一つ一つの内容を（他教科等における「知識」のように）どのくらい理解したかという基準で評価するのではなく、個人の成長に着目することが必要であること  
（自分自身の生き方との関係で理解するものであり、客観的・観念的に理解するものではない）

- ・道徳性に係る成長は毎時間毎時間の授業の中で見取ることができるとは限らないこと

こういったことから、年間や学期といった一定の時間的なまとまりの中で、生徒の学習状況や道徳性に係る成長の様子を把握する必要があると考えられます。

Q 道徳科の授業ではない、普段の学校生活で見られる姿を基に評価を行ってはいけないのか？

普段の学校生活で見られる行動については、これまで通り、指導要録の上では、「行動の記録」として記載する要素になります。

道徳科における評価は、道徳科の授業を行った結果として見られた学習状況や道徳性に係る成長の様子を見るものであるため、授業の中で見られた発言や記述などを基に評価を行うこととなります。

28

## 学習評価の種類

### 目標に準拠した評価

- ・学習指導要領に示す目標に照らしてその実現の状況を見る。
- ・平成12年要録通知以降は、観点別学習状況の評価と評定の両方を、目標に準拠した評価として実施。
- ・評価規準は各学校が設定。（国立教育政策研究所が評価規準の設定に関する参考資料を提供）
- ・絶対評価とも言われてきた。  
※H22年教育課程部会まとめ以降、「絶対評価」とは言っていない。

### 集団に準拠した評価

- ・学級又は学年における位置づけを見る。
- ・相対評価とも言われる。
- ・平成12年通知以降は、目標に準拠した評価に改められた。

### 個人内評価

- ・観点別学習状況の評価や評定には示しきれない子どもたち一人一人のよい点や可能性、進歩の状況について評価するもの。
- ・従来の指導要録では、「総合所見及び指導上参考となる諸事項」において示される。

### 観点別の学習状況の評価

- ・各教科・科目の目標や内容に照らして、生徒の実現状況がどのようなものであるかを、観点ごとに評価し、生徒の学習状況を分析的に捉えるもの。
- ・現行（平成22年指導要録通知）では、学力の三要素を踏まえ、観点ごとに評価（「A」「B」「C」の3段階）。

### 総括的な評価としての評定

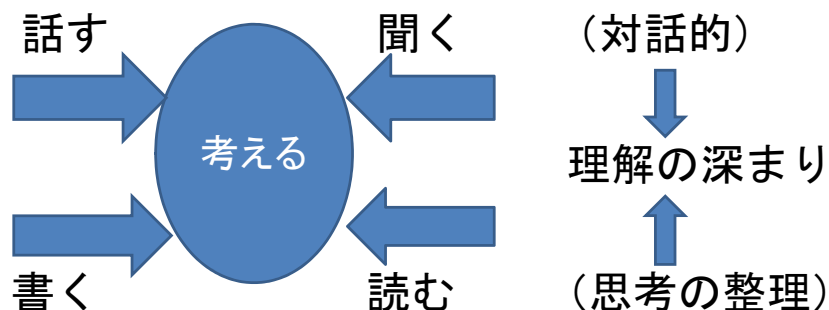
- ・観点別の学習状況の評価をもとに、総括的な学習状況を示すため、5段階（小学校は3段階。小学校低学年は行わない）の評定を行う。
- ・平成12年より、観点別の学習状況だけでなく、評定についても目標に準拠した評価とすることとした。
- ・各観点別の評価を評定においてどのように総括するかは、各学校の工夫が求められる。

道徳科の学習評価は、児童生徒がいかに成長したかを積極的に受け止めて認め、励ます個人内評価として実施

29

## 授業の中での生徒の見取り

言語活動を通して、生徒を見取る。



## 個人内評価を行うために

- ◆「話す」について  
生徒の発言は板書に残っている。写真撮影。
- ◆「聞く」について  
教師や級友の発言を聞き、対話的であるか否かをメモする。  
授業記録の活用も。
- ◆「書く」について  
書いたものから、変化を読み取る。
- ◆「読む」について  
自分事として読めているか。表情に注目。  
一人一人の生徒を、その生徒のよさに目を向けて把握（理解）しようとする評価。道徳科においては、その生徒なりに自己教育（成長）しようとする姿や意志を見て、それに力を貸し、後押ししようとする評価を行う。生徒を愛する教師の姿を表現するものである。見取るためには、生徒の、ちょっとした成長も見逃さず喜ぶ心こそが大切。